

女性の意識変容の促進におけるライフストーリーの有効性

－「気づき」に視点をあてて－

山澤 和子

(日本女子大学大学院生)

【要旨】

女性問題講座は、女性の意識変容を促し、キャリア形成を支援する役割を担っている。講座修了後の学習者に、さらなる意識変容を促進させるには、どのような方法が有効なのであろうか。本稿では講座終了後、数年経た学習者を対象に、ライフストーリーを用いた調査方法を総合的に適用することにより、この方法論が意識変容を促進させる有効性を検証した。具体的には、始めに個人インタビューをし、その後に学習者にライフストーリーを書いてもらうことで、さらに詳しく情報を集め、最後にグループインタビューを行うという3種類の手法である。その際、意識変容の分析の視点を「気づき」にあてた。調査の結果、3種類の調査を前記の順序で行うことが、学習者に「気づき」を生じさせ、意識変容を促進させるのに有効であることを確認した。

1. 研究の枠組み

(1) 研究の背景

女性の意識変容を促すための女性問題講座が各地で開かれている。筆者は、講座修了後もさらなる意識変容が学習者に必要であると考えた。最近では、意識変容に関する、学習支援者の力量形成に焦点をあてた研究、講座内容を対象とした研究などが多くみられる。しかし、学習者に焦点をあて、講座修了後数年を経た、学習者の意識変容を促進させるための方法論に関しては、十分な研究が行われていないといえる。

(2) 「気づき」について

クラントンは「意識変容の学習は自分を振り返る学習でもあり、私たちの前提や価値観を問い直す学習である。」¹⁾と述べ意識変容の学習の必要性を指摘している。そして、メジローが指摘するように、変容理論における批判的振り返りを効果的に行うために、気づきは重要なのである²⁾。ペトリューシカ・クラークソンが「“気づきは道具”なのです。気づいていればいるほど、より多くを選び出すことができ、より多くの選択が可能になります。」³⁾と述べるように、気づくことは次の行動の選択のための指針となるのである。つまり、振り返りの中で生じる気づきが、意識変容にのみならず行動変容にも影響を与えるといえる。そこで、本研究では、気づきに着眼して、学習者に意識変容を促進させる方法論を検討することとする。

では、気づきとは何か。ジョン・スティーブンスは気づきを次の3点から定義している。

①見、聞き、嗅ぎなどの外部世界への気づき。②感覚的接触、皮膚内に感じるなどの内部

世界への気づき。この両者は体感的な気づきである。③現実起っている、経験への気づきを超えた、すべての精神活動をふくむ、空想活動への気づき⁴⁾。このスティーブンスの定義を受けて、本研究では、学習者の感覚や体感、経験によって生じる、新たな発見や再確認を、気づきと定義する⁵⁾。

(3) ライフストーリーを総合的に用いる意義

インタビューや記述によって、人生や人生のある部分を詳細に表現したものを、ライフストーリーと呼ぶ。ダニエル・ベルターが述べるように、ライフストーリーは生育環境から現在まで、社会的背景を踏まえて、人生を語ったものである⁶⁾。桜井厚は、ライフストーリーについて、「個人が歩んできた自分の人生についての物語である。もちろん、人は自分の人生を最初から最後まで、完全に語ることはできないから、自分の人生で意味があると思っていることについて、選択的に語るわけである。」⁷⁾と述べている。女性に限らず成人学習者は、本人の生育環境、学習歴、友人関係、仕事、結婚生活、夫婦関係、家族の価値観、社会的な出来事との関係など、過去のあらゆる生活経験や学習経験を背負っている。これらの経験のうち、学習者が自分の人生で意味があると思っていることを語ることが、気づきを触発する要因になると考えられることから、女性問題学習者の気づきを促すために、ライフストーリーは有用だといえる。

これまでのライフストーリー研究では、小林論文⁸⁾、難波論文⁹⁾、西倉論文¹⁰⁾などがあるが、調査者がインタビューし、記述するなど単一方法で行うのがほとんどである。しかし、気づきを促し確認するには、自己を何度も重層的に、多様な場面から振り返る事が必要である。そのためには、調査者による個人インタビューや記述のみならず、学習者自身が書くことによって自分を見つめなおすことや、グループインタビューなどにより、他者の行動を見、考えを聴くことによって振り返ることも重要であると考えられる。それゆえ、単一方法で行うのではなく、多様な調査方法を総合的に組み合わせることが必要ではないだろうか。

(4) 本研究の目的

以上を踏まえて本研究では、女性問題講座を修了して数年間経過した学習者を対象に、「個人インタビュー → 記述〔学習者がライフストーリーを書く〕 → グループインタビュー」の順序で調査¹¹⁾を行い、講座以後における生活、学習や活動を振り返ってもらい、気づきを促すことを試みる。そして、その結果を気づきに視点をあてて分析し、ライフストーリーを総合的に用いた方法論が、学習者の意識変容を促進させるために有効であるかどうかを検証する¹²⁾。

2. 研究の方法

(1) ライフストーリーの方法と順序

本研究では、①まず個人インタビューで、自分の言葉で、自分自身を振り返ることによって自己を確認する。②その後、そのインタビューのトランスクリプトを読み言葉や考えを確認しながら、さらに書くことによって整理する。③この二段階を経て自己を確認した後で、グループインタビューで他者の考えを確認すると同時に、他者の中での自己を確認する作業を行うことが、学習者に気づきを促すために有効であると仮定し、上記の「個人インタビュー → 記述〔学習者がライフストーリーを書く〕 → グループインタビュー

一」の順序で調査を行いその有効性を検討する。上記の3種類の調査方法の具体的内容は以下のとおりである。

1) 個人インタビュー

各学習者に2回のインタビューを行った。1回目は、生育環境からインタビュー時までを、生育家族関係・学習経歴・職歴・結婚生活・夫婦関係などを、時系列でふり返り、2回目は、講座修了後からの学習活動について語ってもらった。2回とも学習者に自由に語ってもらうという、非構造化インタビューの方式をとった。アンドレア・フォンタナとジェームス・H・フレイは、非構造化インタビューについて「問いの範囲を限定しかねないような、どのような事前のカテゴリー化も押し付けず、社会のメンバーの、複雑な行動を理解する試み。」¹³⁾と述べている。さらに両者は、フェミニストの視点からも、「伝統的に男性的な解釈に依拠してきた文化における女性の歴史を理解し、明るみに出すもの。」¹⁴⁾と述べていることから、非構造化インタビューは、女性の学習者に適切である。

2) 記述〔学習者がライフストーリーを書く〕

個人インタビューの後、そのトランスクリプトを学習者が読み、それを基にして、さらに自分自身をふり返ってもらうために、ライフストーリーを書いてもらった。このねらいは、書くことによりさらに自分自身の理解を深めるのではないか、そこに、新しい気づきが起こるのではないかということである。書くという作業は、個々人により相違があるので、学習者が書きやすいように枚数や形式は指定せず、自由に書いてもらった。

3) グループインタビュー

個人インタビューから約半年後に、グループインタビューを実施した。ブルックスは、女性たちの「語り」の中で意識変容がもたらされる、という概念を提示している¹⁵⁾。梅澤は、「集団成員間の相互作用によって、個人面接ではとても期待できない、新しい考えやアイデアを、期待することができる。」¹⁶⁾と述べている。このように、グループインタビューを行うことで、他者の考えや意見を聞くことができ、当時の自分自身をふり返り確認し、さらに新たな気づきを起すことが可能となる。各回3人ずつ、30代、40代、50代の3グループに分けて行った。年代別に行ったのは次の理由による。女性問題学習において学習者が人生を語るときは、心の深層を表現する必要がある場合が多く、そのため、育った時代や社会環境の類似する同世代のメンバーでグループを構成することにより、価値観を相互に認めやすいコミュニケーション環境を作り出すことが重要である。それによって、学習者が話しやすくなり、さらに相手を理解しやすくなると考えたためである。

個人インタビューを行うにあたって筆者は、学習者に対し1回目は、①ジェンダーの視点をふまえて生育環境から現在までを自由に語る、2回目は②主に講座以降の活動に中心を当てて語る、ということだけを説明し、学習者に自由に語ってもらった後、ライフストーリーを書いてもらった。そして、自分自身を個人インタビューとライフストーリーでふり返った後、グループインタビューによって、他者との会話の中で自分をふり返る作業を行ってもらった。なお本調査は、個人インタビューのトランスクリプトを参考にしてライフストーリーを書いてもらったため、その内容が重複することがあった。そのため両者を総合的にとらえることとした。

(2) 気づきの抽出

本研究ではライフストーリーの語り（前記の非構造化インタビューによる）及び記述の中から、学習者の気づきを抽出することを試みた。言葉で抽出する意味は、気づきを言葉に具体化することで、学習者の変容過程を外部から、より具体的に把握できるからである。ところで、「気づき」は本人に自覚がある場合と無い場合とがある。自覚がある場合は、学習者自身が「気づいた」と言葉で表現したものを抽出した。自覚が無い場合（学習者が「気づいた」と言葉で表現しない場合）は、学習者の語りの流れの中から、先に述べた本研究における気づきの定義、すなわち「学習者の感覚や体験によって生じる、新たな発見や再確認すること」に該当すると筆者が判断できたものを抽出した。

3. 「気づき」からみた調査結果の分析

9 人を講座及び調査での気づきの有無、調査後の行動変容の有無によって分類すると、表 1 のようになる。

表 1 学習者の変容過程の 3 タイプ

タイプ	講座での気づき	個人インタビュー・ 記述による気づき	グループインタビューによ る気づき	調査後の 行動変容	学習者
1	○	○	○	○	A. B. H
2	○	○	○	×	C. D. E. G. I
3	○	●	●	×	F

* 気づきの項目の○印は自己肯定的、●印は自己否定的

さらに、9 人の調査結果を表 1 の 3 タイプに分類し、調査結果を要約して記述すると、以下のとおりである。各事例の中で学習者の語りや記述は、講座（ ）、個人インタビュー「」、ライフストーリーの記述部分『 』、グループインタビュー【 】で示した。学習者の気づきが現れた文章に下線を引いた。ゴシックの書体は、本研究における 3 種類の調査方法に対する学習者の感想や気づきである。斜字はこの方法が学習者に与えた影響と筆者の考察を記載したものである。なお、本研究は主に今回実施した諸調査における気づきに焦点をあてているものの、数年前に参加した講座での気づきについても、調査時点での気づきと密接に関連するために書き加えた。

(1) タイプ 1：A さん、B さん、H さんの事例

A さん

A さんは、短大の授業でジェンダーという言葉に出会った。結婚と同時に夫の転勤でアメリカに赴任した。『帰国後、ファーストネームで呼び合うアメリカ社会と違い〇〇さんの奥さんと呼ばれる日本社会からの疎外感を抱いた。』と書いている。講座受講後は（自分が何をしたいのか、自分がどう生きたいのか自分で考え、その選択に自信を持つことが大切。今まで現状に不満を持つだけで他人のせいにしてきた。）と書いている。その後 6 年間行動変容には至っていない。1 回目のインタビュー時、「経済的自立はすごく難しい、大変なことなんだな」と経済的自立の難しさを語っている。しかし 2 回目のインタビューでは「や

っぱり、経済的自立というのが私の最終的な目標だったんだな一と思い起こしました。」と再度経済的自立の必要性を語り、意識変容が起こっている。

その後、Aさんは『このインタビューのお話があり、自分を見つめ直し、やりたことに挑戦していこうというきっかけをいただきました。個人インタビューの後、記述することによって客観的に自分を見つめなおすことができた。』と述べ、グループインタビューでは【インタビュー、ライフストーリーの書き出しだけでは思い出せなかったことなど、改めて知る良いきっかけになりました。過去に共有した情報を仲間と掘り下げることによって、前向きな気持ちになります。】と述べている。そして【英語の翻訳講座を受講し始めたんです。今度は二期目を受講します。】と翻訳家になるために一歩行動に踏み出した。

話すことより書くことが得意なAさんのようなタイプの人にとって、インタビューをもとに書くという作業は、自分を見つめなおし考えを整理する良い機会となることや、グループインタビューで他の受講者と話すことで、Aさんに新たな気づきを促す可能性をもたらしことが明らかになった。

Bさん

父親が暴言と暴力を行うDV家庭で育ち、大学に行き教師になる夢を抱いていたが、父親に反対され進学をあきらめる。25歳の時に最初の結婚をするが約7年で終止符を打つ。33歳で再婚した後35歳で出産し、この頃から夫が女性遊びを始める。そんな時に講座に出会い（主人に何もいえない自分がいけない、自分の立場を論理的に整理しなくては、自分が変わらなくてはと思いました。）と語る。（女性であるがために抱えていた不満や悩みが、自分のせいではなく社会の問題だってことに気づかせてもらった。）と語る。

その後、夫の仕事でシンガポールに赴任する。夫の女性遊びはシンガポールでも続く。「離婚も考えたんですけど、子どもを一人で育てていけないなと思って。夫婦という枠を超えて関係を作っていければいいと思うようになりました。」と夫との新しい関係づくりを試みる。「夫は家庭を壊したいとも思っていないようだし、夫の遊びは病気だと思うんです。であれば私もちょっと大人になって。前々から心理学的なことに興味があったので、自分と同じような立場で悩んでいる女性を励ます立場になりたいと思ったんです。」と夫婦問題を自分の将来の活動に生かしたいと気づく。

家庭の事情で大学進学をあきらめたが、グループインタビューの時は、教育学と心理学を学ぶ放送大学の学生になっている。【今やっと勉強し始めたんです。やっぱり私は勉強したかったんだなって。】と彼女は長年抱いていた、勉強したいという夢をかなえたのである。

Bさんにとっては、個人インタビューのほうが、夫との関係を具体的に話しやすかったようだ。記述ではほとんど書かれていない。だが「インタビューによって、また文章にすることで、より具体的に行動を起す段階にまで進めた。」と述べていて、個人インタビューを受け、ライフストーリーを記述したことは、Bさんに放送大学進学の気持ちを固め、行動に移すという効果をもたらしている。

Hさん

子どもの成長を見て、自分も勉強したいと講座に参加した。（子どものせいにしたことが多くあったが、子どもがいるからは理由にならない。経済力は自由を得ることを念頭において、言い訳をせずにいつでも働ける準備をしておきたい。）と語っている。修了後、パートで働くが、日本でも数症例しかないという、九死に一生を得る原因不明の大病を患い、

幸運にも奇跡的に回復する。『人との和の中で人は育ち広がる。』と書いており、死に直面して人間関係の大切さを再確認している。入院中は闘病記を書いたが、1度目のインタビュー時点では、まだそれを読み返えず勇気を持てないでいた。2度目のインタビューの時にHさんは筆者に日記を見せ、退院後初めて2年ぶりに日記を読む機会を自主的に作る。グループインタビューでは【人の意見を聞き、考えさせられることもあり（講座で学んだことなど）数年後にふり返ることができよい体験をさせていただきました。（これから）前向きに何かをします。】と語る。

2度目のインタビューでHさんが起した行動（退院後初めて日記を読むこと）は自己解放につながるものであろう。それがグループインタビューでの気づきにつながると考えられる。その後「食生活アドバイザー」の勉強を始めている。

(2) タイプ2：Cさん、Dさん、Eさん、Gさん、Iさんの事例

Cさん

地域の福祉ボランティアリーダーを務める活動的なCさんは、男尊女卑の古い考えを持つ夫の暴言や暴力に悩んでいたこともあり、講座受講に意義があったという。講座受講中に父親の死に直面している。父親は地域活動の実践者だった。講座で自分自身をふり返り、地域で活動するのは父親の影響だということに気づく。そして（私という人間はこの世に一人しかいないということに気づいたんです。）と述べる。

講座後、夫が退職金を得てから、Cさんは自己主張をしはじめるが、夫の「離婚だ」という脅かしに怯んでしまう。「私が脅かしにのってしまったこと自体、何と私は自立していなかったと今にして思います。」という。だが徐々に感情的にならずに、自分の立場を説明できるようになったという。「私が溜め込んでいた怒りは自分にも責任があった。」と気づきを見せる。グループインタビューに参加し【講座での知らなかった情報を聞き、きっと知っていたら講座後の行動も違っていたと思う。お互いに影響を及ぼしていたことがわかりました。】と語る。

Cさんは他者と話し合うことにより、他者との関係を理解している。「思いを言葉にして文章に起すことは大切だ」と記述後に語っている。

Dさん

大学で女性学を学んだDさんは、留学や結婚後の海外駐在経験もあり、フルタイムの仕事に充実感も感じていたが、出産後に子どもが死亡するという悲しい出来事の後、専業主婦となる。受講動機は地域での仲間作りである。講座では（主婦という世間的に従属的な身分になったとしても、自分を諦めなくて良いという考え方が確認できた。）と語り、キャリアウーマン志向から専業主婦に転じたが、専業主婦の生き方を肯定する考えを確認している。そして個人インタビューでは「イデオロギーに振り回されずに自然体で生きて行きたい。」と述べている。

地域での仲間づくりが動機だったDさんは【インタビューや記述によって、同じ意識の人たちと会えたことが大きな学習だったことを再確認できた】と述べている。「書く事によって癒された」との感想を述べており、学習者にとってこの方法は、再確認という気づきの場でもあり、また癒しの場でもあることがわかった。

Eさん

講座では（ライフワークに合わせ、男女間でバランスよくペイドワーク、アンペイドワークを分担するのが良い）と気づき、修了後、英会話講師の仕事と子育て支援ボランティアを始める。仕事で貯金したお金でEさんはドイツ旅行をする。「自分で誰にも気兼ねすることなく、使えるまとまったお金は大事ななと思います」と経済的自立の必要性を再確認する。**【グループインタビューを行うことで、自分たちの中に共有できるものを確認し合い、より親密に感じた】**と述べており、他の学習者たちへの理解をさらに深めている。

Eさんは、「インタビュー（聴いてもらうという行為）で自分自身を（筆者に）等身大で受け入れてもらい、インタビューと記述することにより癒された。インタビュー、記述、グループインタビューの流れが非常に大事だと思った。」との感想を寄せている。つまり、個人インタビューで等身大の自分を受け入れてもらうことは、調査者に対して安心感を抱き、その後の記述やグループインタビューで、学習者が心の深層を出しやすい状況を作ると考えられる。

Gさん

夫の転勤で引っ越してきた地域で、何か活動したいと講座に参加した。講座を受講して（力のなさはわかったが、自分で何かしなくては）と気づき、その後民生委員や子育て支援のボランティアを始める。「子育て支援を立ち上げたメンバーで残っているのが私一人になりました。やはり続けていくことが私のやり方なんだと再確認しました。」と語る。そしてグループインタビューでは、**【自然にでき得ること、それが大事だと納得できました。】**と述べている。

Gさんは、個人インタビュー時よりもグループインタビュー時のほうが、積極的に話をし、筆者や他者にGさんの心を開く様子が鑑みられた。**【みなさんも私と同じように、自分自身をなんとかしたい、自分が生かされたいと思っていたのだと感じました。】**と感想を語っている。グループインタビューは他者を理解して認めるという気づきを促すのに有効だといえる。そしてこれらの方法をとることは他者との親密性を高め、心の深層を話しやすい状況を作る効果があるといえよう。

Iさん

講座受講以前からカウンセリングの学習をしていたが、講座で赤ちゃんを連れて受講している人を見て、（働く母親だけでなく育児専門の母親の預かり場所があつていい）と考え、修了後、子育て支援ボランティアをする。インタビューでは「私の行動はカウンセリングの考えが基本で、縦軸にカウンセリング学習があり、横軸に市民活動があることを認識しました」と述べる。

Iさんは、**【出会った時点では、ついていけない考え方、ついていけない感覚もありましたが、グループインタビューでは、相手をすんなり受け入れられる気持ちになりました】**と、他の学習者を認めている。グループインタビューは他者とより親密に会話する場でもあり、他者を理解し認めるという気づきの場になるため、他者理解に影響を与える方法であるといえる。

(3) タイプ3：Fさんの事例

Fさん

講座では（夫婦が共に自立することの大切さを学び、夫に少しずつ自分の考えを言える

ようになった。) という。だが今回の調査で自分をふり返った時『講座で何かが変わったはずなのに、また講座を受ける前のような気持ちになってジタバタともがいている自分をみると、変わったような錯覚を起しただけではないかという思いになっています。』と書いている。

Fさんの気づきは、変わっていないと言う自己否定的な気づきであり、気づきには自己肯定的、自己否定的の二種類が確認された(表1参照)。グループインタビューの後の感想では『**皆に会って、自分は何も変わっていないと思いました。**』と述べており、インタビューでは現れなかったが、記述で感じ始め、グループインタビューで他者の行動や考えを知ることによって、それが、再確認し強化されている。Fさんの場合は、単一方法では現れない自己否定的な気づきが、この3種類の方法を行うことで現れている。

気づきは簡単に促せるものではないものの、以上9人の事例からは、一つの調査では確認できない気づきであっても、他の方法を行うことにより確認できることが明らかになった。表2は、上記の事例から各段階における気づきを抽出・整理したものである。記述は学習者が個人インタビューのトランスクリプトを基に書いたため、個人インタビューの内容と重複する箇所が多い。そのため、個人インタビューと記述をまとめ、特に記述のみで生じた気づきをゴシックの書体で表した。

表2 調査で確認された学習者の気づき

学習者	講座での気づき	個人インタビューと記述〔太字〕の気づき	グループインタビューでの気づき
A	同じように悩んでいる人がいる。専業主婦は潜在能力が高い。他人のせいにしていた。	経済的自立はすごく難しいが最終目標。やりたいことに挑戦する。	講座で学んだことを継続するために、同じ気持ちで学習した仲間と話すのが効果的。
B	自分の立場を論理的に整理する。自分を変える、女性が抱える悩みは社会の問題	同じような立場で悩んでいる女性を励ます立場になりたい。命と人権を守ることに力を注ぐ。	やっぱり私は勉強したかったんだ。
C	私という人間はこの世に一人しかいない。父親は地域活動の実践者だった。	自立していなかった。溜め込んでいた怒りは自分にも責任がある。	知らなかった情報があり知っていれば行動も違っていた。お互いに影響を強く及ぼしている。
D	地域で何かしたい。経済的自立、自活できるラインが課題。	イデオロギーに振り回されず自然体で生きていきたい。	同じ意識、活動の人達と会えたことが学習だったと確認。
E	ライフワークに合わせ男女間でバランスよくペイドワークとアンペイドワークを分担。	誰にも気兼ねせずに使えるまとまったお金は大事	今だから聞ける、話せるという時間の経過の大きさ。自分たちの中に共有できるものを再確認。
F	夫婦が共に自立することが大切。夫に自分の考えをいう。	変わったような錯覚を起しただけなのではないか。	同じようなことを繰り返し、自分は何も変わっていない。
G	力の無さは分かったが、自分で何かしなくては。	続けていくことが私のやり方なんだ	地道な努力が必要。自然に出来ることが大事。
H	子どもがいるからは理由にならない、言い訳をしない。いつでも働ける準備をする。	人との輪の中で人は育ち広がる。	少し外へ外へと目を向ける。
I	働く母親だけでなく育児専門の母親の預かり場所があつてよい。	縦軸にカウンセリング学習があり、横軸に市民活動があると認識した。	他の学習者を受けいれる気持ちになった。

4. 考察

3種類の調査方法を、「個人インタビュー → 記述〔学習者がライフストーリーを書く〕 → グループインタビュー」の順序で行うことによって学習者全員に気づきが確認でき、以下の3つの知見が得られた。

第1に、3種類のそれぞれの方法において気づきが確認された。学習者によっては個人インタビューと記述の得手、不得手があるため、それら使い分けることで、多くの気づきの発生を促すことができるものと考ええる。グループインタビューでは、他者の考えを聞くことで、相手を理解し認めるという、新たな気づきが生まれることも浮き彫りにされた。他者を認められるようになるということは、意識変容においては重要な気づきといえよう。また、これらの方法は気づきを促すだけでなく、HさんやDさん、Eさんのように、自己解放や癒しの効果もあることも明らかになった。なお、3種類の方法を用いることは学習者に負担を強いるにもかかわらず、各事例の後に記述したように皆、この方法を大変好意的にとらえてくれた。

第2に、本研究で行った順序は、学習者に気づき促すため有用であることが確認された。Eさん、Gさん、Hさんの事例から、個人インタビューを最初に行うことは、筆者との人間関係を構築する役割を果たしており、一度筆者に受け入れてもらえた安心感から、その後の記述においても、自分自身をありのまま表現できるということが確認できた。AさんやFさんの事例から、個人インタビュー後に記述することは、自分自身をさらにふり返り、客観的に見つめなおすことも認識できた。最後に、自分自身を記述で十分ふり返った後、グループインタビューを行うことは、他者と自分とを相対化し、他者理解を容易にするために有用であることがわかった。

第3に、多様な方法を行うことによって、変容過程が明確になることがわかった。この方法論で気づきを促した結果、3タイプの変容過程が確認された（表1参照）。とくに行動変容にまで発展したタイプ1は貴重な成果である。さらに、気づきには自己肯定タイプと自己否定タイプがあることが明らかになった。

以上の3つの結果から、ライフストーリーを総合的に用いることは、女性の学習者に意識変容の基盤となる気づきを促す可能性が高く、中でもこの順序はその可能性を高めていると考えられる。そして学習者の中では、意識変容のみならず行動変容にまで発展している学習者もあり、この方法が意識変容・行動変容を促進させるために有効であることが明確になった。

最後に、今後の研究課題として、3種類のうちどれかを欠如させる、あるいは調査の順序を変えるなど、他の代替的な方法論との比較分析を行うことによって、今回の研究方法の効果をさらに確認していくことが必要である。そして自己否定的な気づきが生じた学習者に対する対応策の検討も課題である。

注記・引用文献

¹⁾ Patricia, Cranton , *Working with Adult Learners* . Wall & Emerson, Inc. Canada, 1992, p. 146

²⁾ Mezirow, J, " On Critical Reflection" *Adult Education Quarterly* volume 48.No.3,

1998 pp. 185-186。

- 3) ペトリューシカ・クラークソン著、日保田裕子訳『ゲシュタルト・カウンセリング』川島書店、1999、p. 49。
- 4) ジョン・O・スティーブンス著 岡野嘉宏・多田徹佑・リード恵津訳『気づきーゲシュタルト・セラピーの実習指導書ー』（株）社会産業教育研究所、1982、p. 7。
- 5) 学会発表では「気づき」をタイプ別に分類したが、本稿での「気づき」の定義は本文に記述したように幅広くとらえている。
- 6) ダニエル・ベルト著、小林多寿子訳『ライフストーリー エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房、2003、p. 59。
- 7) 桜井厚著、山田富秋編「ライフストーリーという研究方法」『ライフストーリーの社会学』北樹出版、2005、p. 10。
- 8) 小林多寿子「語られたタクジ・ヤマシタ ー日系アメリカ人一世のライフストーリー再構築ー」『日本女子大学紀要 人間社会部第 14 号』2003、pp. 1-20。
- 9) 難波淳子「中期の日本人女性の自己の発達に関する一考察 ー語られたライフストーリーの分析からー」『社会心理学研究 第 15 巻第 3 号』2000、pp. 164-177。
- 10) 西倉実季著、桜井厚編『普通でない顔』を生きることー顔にあざのある女性たちのライフストーリーー『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房、2003、pp. 65-85。
- 11) 調査の概要 (1)調査対象者：2000 年の横浜市青葉区「女性問題と話し合い学習」講座（主婦を対象としたジェンダーに敏感な視点を養う啓発講座）受講者 9 名。プロフィール（年齢、家族構成、活動内容の順）。A：37 歳、夫・子 2、英語翻訳講座受講中 B：48 歳、夫・子 1、放送大学学生 C：58 歳、夫・子 2、ボランティア団体代表 D：48 歳、夫・子 1、英語翻訳 E：48 歳、夫・子 3、英会話講師 F：36 歳、夫・子 2、PTA 委員 G：54 歳、夫・子 2、民生委員・子育て支援 H：36 歳、夫・子 1、PTA 委員 I：54 歳、夫・子 2、子育て支援カウンセラー。9 人のうち B さんを除く 8 人は、講座後の自主グループで子育て支援のボランティア活動をする。筆者は学習支援者として講座に携わった。(2)調査時期 1)個人インタビュー調査：学習者 1 人に 2 時間程度を 2 日間 2006 年 5 月～7 月 2)学習者がライフストーリーを記述：2006 年 8 月～9 月 3)グループインタビュー：2007 年 1 月～3 月、各 3 人ずつ 2 時間程度。
- 12) 2006 年 10 月の学会発表では、「気づき」を個人インタビューとライフストーリーを書くという方法で分析したが、その後研究を重ね、グループインタビューを加えた三通りの方法による知見を得た。本稿では発表時の研究を発展させ、これらの方法が気づきを促すために有用であるとの論を展開した。
- 13) アンドレア・フォンタナ、ジェームス・H・フレイ「インタビュー：構造化された質問から交渉結果としてのテキストへ」（『質的研究ハンドブック 3 巻』平山満義監訳、藤原顕編訳）北大路書房、2006、p. 50。
- 14) 同上 p. 54。
- 15) Group for Collaborative Inquiry, "The Democratization of knowledge" *Adult Education Quarterly* 44, 1993, pp. 43-51。
- 16) 梅澤伸嘉著『実践グループインタビュー』ダイヤモンド社、1997、p. 64。